



宗一郎の承り候

中川宗一郎
うすい
しん
えん

空を見上げて、宗一郎は大きなためいきをついた。

「うっとうしいなあ」

たれ込めた厚雲から、今にも雨が落ちてきそうだった。

「なんでや。せめて天気だけでも、ぱーっと晴れんかいっ」

宗一郎の気持ちをつさぐのは、曇り空だけでは無い。父親のことも、長くのびきった髪の毛のことも、うっとうしくてならなかった。

家の中に入っただけ、

「おはようさん」

声と一緒に板戸が、がらっと開いた。

長屋の大家さんだ。えりまきを首に巻きつけて、両手は袖の中に引っ込めている。

土間にいた宗一郎は、ていねいに頭を下げて、

「お世話になってます」

と、声を張り上げながら、ほおにはりついた髪の毛を、じやまっけに後に払った。

「元気でよろし。商売人は、元気やないとあかん」

「はい」

「はいやのうて、返事はへえの方がええんやけどなあ」

宗一郎は首をすくめて、うつむいた。

あいそ笑いもできるようなになったし、何をいわれても「すみません」とぺこぺこおじぎをされている。でも、「へえ」だけはどうしてもいえない。いったつもりでも、